

## 聞き取る力や応答する力の高まりをねらった実践例 〈2年生の取り組み〉

### (1) コミュニケーションの実態

2年生は男子7名、女子4名の計11名で構成される。障害は、脳水腫、てんかん、自閉的傾向、関節性硬化症、孔脳症と多種多様であるが、S-M社会生活能力検査では6歳～11歳とあまり大きな差はない。簡単な指示の理解は比較的良く、自分の思いや考えを表現することも比較的できるため、机上学習や作業に集中して取り組むことはある程度可能である。しかし、周囲を意識して振舞ったり、相手を気遣ったりする意識に欠ける。また、経験不足のためか応答に自信がなく、相手から何を要求されているのか、自分が何を答えれば良いのかがわからなくて、全然要求と別な答えや行動をとったりすることがある。つまり、相手が何を要求しているのか聞き取る力や、聞き取った内容を理解し、自分の中で答えを用意して、相手に返していくという応答の力が低いと考えられる。それ故に、自分の言いたいことを推察してくれる大人との会話を好みがちである。

### (2) ねらい

- 指示や内容を理解する力
- 相手を意識する態度
- 相手の質問や要求に応じた答えを自分なりの表現で応答する力

### (3) 指導方針と手だて

生活一般と課題学習を中心に指導し、全体的な指導は生活一般で、基礎的な力が不足している生徒には課題学習で重点的に指導する。全体的な指示や発問に対しては、必ず意思表示を求める。相手の言っていることや発表が聞こえなかったり、わからない時には自分の方から聞かせる。板書や短冊を多く使用し、今何を話しているのかが視覚的にわかるようにする。生徒同士のやりとりを大切に学習した内容を発表する場を多く設定する。ペア学習を取り入れ、相手の立場になった話し方や聞き方の態度、意欲面を育てる。指導者は意図的に日常社会に使われる言葉を使うが、質問の内容が理解し難い場合は、話し合いが円滑に進むように平易な言葉に直して再質問する。

### (4) 指導計画

	生活一般学習の単元及び題材	課題学習の単元及び題材
4月	自己紹介、自分のからだ(性教育)	自分のプロフィール
5月	校外学習の計画、友達の作品の鑑賞	相手に伝わる話し方、目上の人への言葉づかい
6月	私の成長(人の一生)、奉仕活動の反省と計画	原稿を大きな声で発表しよう
7月	友だちの長所(なかま作り)、生い立ちの発表	性被害と自慰行為
9月	進路決定までの道のり、現場実習	電話のかけ方
10月	現場実習	実習中の生活リズム
11月	自分発見、友達の長所、現場実習	生活に必要な一般常識
12月	忘年会の計画	学級通信作り
1月	冬休みの暮し、私たちの進路	生活に必要な一般常識、趣味を持つ

2月	休日の過ごし方（人の一生）	自分の家族、趣味を持とう
3月	1年を振り返って、進級にあたって	

(5) 指導の実際

① 生活一般の授業「友だちの長所」から

a ねらい

- ペア学習を取り入れ、友だちの長所を教え合うことを通して、お互いの聞く態度、話そうとする態度を身につけさせる。
- 一人ひとりのコミュニケーション指導内容表の「説明」や「人との関わり」の指導目標を意識して、到達を図る。

b 授業の展開

学習活動	指導上の意図・留意点	生徒の様子
ペアを決める。	最初なので生徒が自由にペアを決めても良いとして、話しやすい相手と組めるように配慮した。	ペアを組むのは初めてなのでざわついていたが、自由に決めて良いことになったので落ち着いた。
一人3分の時間で相手の長所を話す。（話されたことを記録する。）	話に行き詰まっているペアに対しては、「～の時は〇〇さんはどうでしたか?」と、手がかりを与えるような声かけをし、日常生活の中で気の付いた点を具体的に挙げさせるようにした。	机を間に挟み話しくさうだったので、机を取ってお互いの横に並ぶようにするとぼつりぼつりと話し始めた。
ペアの意見を取り入れて、自分の長所を発表し、質問に答える。	発表の具体的なパターンを示し、発表に対する不安感を和らげるようにした。質問が出にくい時には、指導者が生徒の一人として、質問し、やり取りの場が生じるきっかけとなるように配慮した。	相手の言ったことに対して「どんな時に」「例えば」というような質問を聞く側が返すようにすると体を前に乗り出して話をするようになった。「えっ」「うれしい」というような反応を示すことによって、更に話し合いが盛り上がるペアもあった。
		逆に、どんなに話し手が話をして、反応を示さず相手の顔を見ないため、「〇〇さんは話を聞いてくれませんか」と訴える生徒もいた。

ペア学習を初めて取り入れて実践した授業であったが、「自分の長所」というのはなかなか自分で見つけることができなかったが、他人の目を通して自分を知る機会には適していたと考える。

また、ペアで話し合っ中で、話がしやすい態度やどういふふうに話をすれば良いか等、気の付いた事は、相手の顔を見る、うなずいたりことばを返す、わからないことは聞く、下を見ない、よそ見をしない、手悪さをしない、相手の顔を見る、声は大きく（よく聞こえるように）、はきはきと話す（口を動かす）等を挙げることができた。

この実践を通して特に変容の顕著だった事例を上げる。



ペア学習

	はじめの実態	変容
K 男	<p>人の話を相手と正対して聞かない。 口を開けずに話すため、相手に話が伝わらない。 質問を聞き逃してしまっても、黙っていて答えないし、また尋ねようもしない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペア学習の話し合いの中で気の付いた点を掲示物にして教室内に掲示し、それを読んでからペアで話し合うと、意識して、相手を見、声を大きくしたり、はきはきと話そうとした。</li> <li>・質問を聞き逃した時には「もう一度お願いします」と話し手に尋ねることができるようになった。</li> </ul>

## ② 課題学習の取り組み「電話のかけ方」から

現場実習が近くなり、実習での遅刻や欠席が考えられるため、「電話のかけ方」について指導する必要があり設定した題材である。

### a ねらい

- ・電話をかけることを通して相手の話すことを理解する力や要求に応じた応答する力を培う

### b 実践例

最初の実態	手だて	指導後の変容
<p>電話を使ったことが無く、自分で番号を回して電話をしたり、電話で会話をした経験がないため、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の電話番号を知らない</li> <li>・名前も名乗らないいきなり「休みます」と言って受話器を置いてしまう。</li> <li>・受話器を持ったまま相手の話すことに対して声を出さないでうなずいている。</li> </ul> <p>等が見受けられた。</p>	<p>欠席または遅刻によって、話す内容を変えてパターン化する。</p> <p>校内の電話機を使い、学習したことをシュミレーションし、結果の反省をする。</p> <p>実際に校外の電話ボックスから学校に電話をかけて対応してもらい結果の反省をする。</p>	<p>校内でのシュミレーションで練習し、対応のまずさを指摘されることで、パターン化された話の内容なら電話を使って話ができるようになってきた。</p> <p>しかし、指導者がわざとパターンから外れる話題を持ち出すと途端に声のないうなずきや相手に対する言葉づかいの乱れが起きやすい。</p> <p>実際に公衆電話でかけた場合、テレホンカードの入れる場所が分からなかったり、電話ボックスからの出方が分からなかった者等がいたが、それらは1回の練習で理解することができた。</p>

この指導を受けた生徒の中で現場実習を欠席した生徒は、自分で実習先と学校に欠席の連絡を入れることができた。

## (6) 考察と今後の課題

2年生は他の学級と比較すると能力的にはやや高く、生徒間の人間関係も悪くないので、ペア学習を取り入れたことは生徒の「聞きたい」、「話したい」という意欲を引出すことには大変有効だった。この実践で、生徒達に身についた「聞く態度」は人間関係をより良好なものにすると思える。

今後の課題として、聞き取る力や、応答する力を高めるための基礎的な力となる、質問された言葉の意味の理解、発表したい内容(意思)を表す適切な表現等の「語彙の拡大」に対する指導も考慮していかなければならない。(岸田)



「電話のかけ方」の学習から